
W・K・バルトン記念事業

1. W・K・バルトンの来日

幕末から明治時代に入ると日本はコレラの流行に悩まされることになった。コレラは日本では経験したことのない悪疫で、その原因すら解っていなかった。当然、日本人の誰も免疫を持っていないのだから、一度コレラが出るとまたたく間に大流行したのであった。

コレラは明治維新後、西南戦争を機に毎年のように流行し、明治新政府はその対策に頭を痛めた。

明治新政府に出仕した長与専齋は、岩倉遣欧米使節団の随員として欧米視察にでかけた。

そこで、近代上下水道に出会い、長与は衝撃を受けた。この調査で長与は予防医学（公衆衛生）という社会性を持った思想に目覚め、その実現手段として上下水道という社会インフラの重要性を悟ったのである。帰国後、長

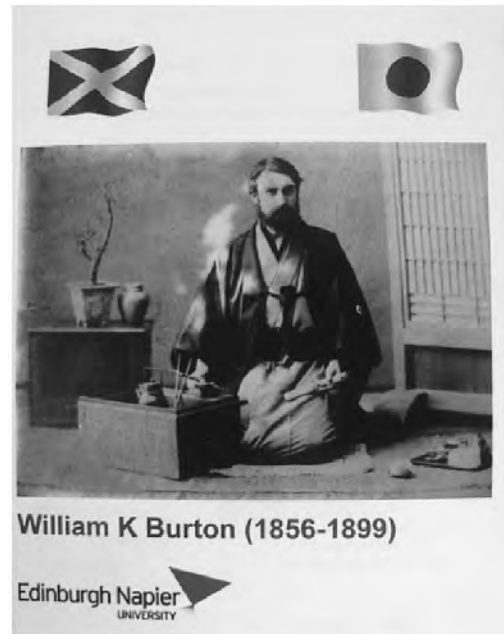
与は早速その実現に向けて走り出すが、いかんせん当時の国内では近代上下水道とは何であるのか、その重要性を理解する人々は欧米に留学した人は別として、殆どいなかったと言っても過言ではない状況であった。当然技術者もいなかった。そこで、長与は国内で上下水道技術者を育成するために、お雇い外国人を招聘することを決意し、英国からW・K・バルトンを招いたのである。こうして明治20年5月26日、バルトン先生は帝国大学工科大学衛生工学講座の初代教授として来日した。

バルトン先生の来日経緯については、従来長与の命を受けて内務省の永井久一郎が招聘したとされていた。しかし、バルトンの研究者である大阪経済大学名誉教授稲場紀久雄氏の調査により、ロンドン在住の河瀬眞孝駐日公使の推薦によることが明らかになった。

記念講演会はバルトンの墓参に合わせて何度か開催されているが、この会を通じ様々なバルトン研究家が多くの研究の成果を報告し、我々もその果実を享受している。

2. バルトン先生が残した業績

バルトン先生は工科大学で我が国最初の「衛生工学」に関する講義を行った。当時、公衆衛生や上下水道を体系的に学べるのはこれが唯一のものであり、これにより、多くの学才たちが全国に羽ばたいていった。中でも、各地の大学に行き、教授となった人々は、さらにその弟子たちに衛生工学を伝授し、その成果は末広がりとなって、その人脈は現在にも継承されている。まさにバルトン



先生が「我が国衛生工学の始祖」と言われる所以である。

また、明治 22 年 1 月からは、内務省衛生局雇工師を兼務することとなり、後藤新平衛生局長と絶妙なコンビで日本の衛生行政に携わることになる。もう一つのバルトン先生の大きな功績は、全国 28 もの都市を巡り、上下水道事業に関する指導、助言を行ったことである。指導、助言と言ってもバルトン先生の偉いところはその地の地勢を確かめ、水道水源についても自らの足で実際に現地を踏査したうえで結論を出していることである。単なる机上の技術者ではなく、現場を大切にすする実証主義的な学者兼技術者であった。

現在、我々は都市生活において最も重要なライフラインである上下水道の恩恵を享受し健康な生活を堪能しているが、その基礎を作り、その意思が現在にまで引き継がれていることが何といてもバルトン先生の最大の功績であろう。

また、写真技術についてはイギリスでも新進気鋭の研究者として知られ、カメラマンとしても優れた才能を発揮し、濃尾大震災や磐梯山噴火の記録写真などをベースにした数々の写真集を刊行している。さらに、榎本武揚等とともに「日本写真家協会」の設立を主導し、「浅草凌雲閣」、通称「浅草 12 階」の設計者としてもその名を知られている。

このように数々の業績を残した後、任期满了に伴い、明治 29 年 7 月、衛生局長後藤新平のたつての要請により台湾へと旅立った。台湾においては台湾諸都市の衛生状況調査や台北市や基隆市の下水道計画調査を行うなど、その功績に対しては現在でも台湾国民から感謝されている。しかし、休暇を得て帰国の途上、病のため東京で急逝された。享年 43 歳。まだまだ活躍できる若さでの死去であり、故郷に戻ることなく天国に帰ったことは本人にとってもさぞや残念なことであったと思われる。

3. バルトン記念事業

3-1 バルトン墓碑及び没後 80 年忌

バルトン先生は東京の青山霊園に静かに眠っている。霊園には高さ 3 m はあろうかと思われるほどの大きな石碑が建てられている。墓碑には、以下のような文字（英文）が刻まれている。日本語に訳すと

「1865 年 5 月 11 日スコットランドにて誕生。

前工科大学教師、

内務省顧問技師台湾総督府顧問技師

1899 年 8 月 5 日東京にて没。友人建立」

とある。「友人建立」とあるように、バルトン先生には教え子や薫陶を受けた人々が大勢おり、これ等の人々の中の有志がこの墓碑を建てたのであった。

バルトン先生の数々の功績を称え、先生を改めて偲ぶために、東京大学の石橋多聞教授が中心となって、1979 年に「バルトン没後 80 年忌」が開催された。その終了後、石橋教授は日本下水文化研究会の設立に関わった稲場氏に以後「バルトン先生の顕彰を頼む」と依頼した。稲場氏はこのことを重く受け止め、以後、本会が実質顕彰事業を引き継ぐことになったのである。

3-2 '92 バルトン忌

日本下水文化研究会は会が発足した1992年、バルトンの命日である8月5日に日本下水道協会会議室で「'92バルトン忌」を開催した。当日は以下のプログラムで記念講演が行われ、その後会場を青山霊園に移して墓参を行った。

① 開会挨拶 当会代表評議員西堀清六

② 「墓碑が語るバルトン人脈」

稲場紀久雄

③ 「近代上下水道の父、バルトン」

東京大学教授 藤田賢二

④ 「近代水道の原点と現在・未来」(財)

廃棄物研究財団 顧問 小林康彦

⑤ 「英国大使館からのメッセージ」ブ

リティッシュカウンシル駐日代表

R.P.Joscelyne

日本下水文化研究会はこれを第1回とし、以後「バルトン忌」を毎年実施することを決定した。

3-3 バルトンの親族探し

バルトン没後100年を翌年に控えた1998年(平成10)、下水文化研究会代表の稲場氏は英国におけるバルトンの親族について調査を開始した。手始めに、日本スコットランド協会稲永丈夫理事にその手がかりを得るべく相談した。稲永理事は早速スコットランドの新聞に情報を提供した。すると、1999年5月10日付エディンバラ・イヴニング・ニュースに掲載された鳥海幸子さんの記事にジーン・クリスティさんから応答があった。

ジーンさんはバルトンの母方の筋に連なる親族で、稲永理事は早速エディンバラに彼女を訪問し、数々の情報を入手した。ジーンさんの祖母はW・K・バルトンの母上キャサリン・イネスの兄弟ジェームスの子供だったが、正嫡の子ではなかったために、正規の記録は残っていないとのことであった。そのため、新聞社に名乗り上げる資格があるか否か迷われたようだが、鳥海さんの調査に協力した

'92バルトン忌への英国大使館からのメッセージ

英国大使館からのメッセージ

下水文化研究会のバルトン記念会は英国と日本の関係において二つの理由から大変重要なものであります。

その一つは二国間に存在する非常に緊密な関係を日本が認めていることとあります。もう一つは、明治時代に、少し早い時期に鉄道がありましたが、下水に関しても大土木事業があったということです。しかし、W.K.Burtonが下水道界に遺された功績が彼の母国にとっても見過されるべきではないことは英国の上下水道や歴史に関心をお持ちの方々に彼が思い起こされるのと同じように大切なこととあります。

私たち British Council は、英国の技術上の専門知識と共同でなされた日本の初期の Industrialisation を祝う記念会に参与できますことを誇りに思います。私たちは W.K.Burton が非常に効果的に育んだ友好と善意の基礎を見続け、また、これらが両国の将来の技術や文化的関係にとって動かしがたい基礎として用いられることを望んでおります。

彼は本当に「日本の上下水道の父」であり、今も関西に住んでおられるご家族の祖父であります。この偉大な人に賛辞を呈することは私にとって大きな喜びであります。また、私にこのような機会を与えてくださった貴研究会およびその会員の方々に感謝いたします。

1992年8月5日

ブリティッシュカウンシル駐日代表

R.P.Joscelyne

いとこの思いから申し出られたとのことであった。

とはいえ、彼女の有しているイネス、バルトン両家の家系に関する知識は相当なもので、その後のバルトン調査の展開に貴重な情報を提供して下さることになった。さらに、後日、ジーンさんから提供された資料を基に、稲永理事はエルギンの図書館に行き、イネス一族に関する資料を探索している際に「Memoir of Cosmo Ines」という小冊子を見つけ、この著者が Mrs.J.H.Burton であったことを知り、ここにイネス家とバルトン家の結びつきが明らかになったのである。John.Hill. Burton はまさに W.K. バルトンの父上である。

また、アバディーンにはバルトン先生の祖母の家系である D. パトンさん (Mr.David Paton) が健在であることも判明した。パトンさんはスコットランド産業振興会会長で、その部下であるアランさん (Mr.Alan Wilson) と稲永理事は仕事で懇意にされていた方であった。このお二方はその後始まる日英交流で重要な役割を果たされることになるのである。

3-4 '99 バルトン忌～バルトン没後 100 年記念～

1999 年 (平成 1) 8 月はバルトン没後 100 年の節目の年にあたるため、下水文化研究会は特にバルトンの曾孫に当たる鳥海幸子さんをお招きして、記念会及びシンポジウムを実施した。記念会にはブリティッシュ・カウンシル駐日代表のマイケル・バレット氏からメッセージをいただいたが、バレット氏はこの直後に任期満了で帰国した。このことがバルトン生誕 150 年記念事業にグレートブリテン・ササカワ財団から多額の資金援助を受ける強力な援軍になったのである。同財団が行う資金援助の決定は英国側が行っており、バレット氏は帰国後、同財団の英国側責任者に就任されたからである。同財団の担当者も、バレット氏はバルトン及び下水文化研究会のこともよく理解しているので、資金援助については問題ないでしょうと太鼓判を押してくださったが、まさにその通りになったのである。このことに関しては、毎年行ってきたバルトン記念会、墓参の実績が認められた思わぬ効果であった。

また、同時に行われたバルトンの墓参には読売テレビの取材も入り、夜のニュースで放映された。バルトン墓参会も 7 回を重ねるにつれてようやくマスコミにも注目されるようになってきたように感じられた。

3-5 W・K・バルトン生誕 150 年記念行事

3-5-1 序奏

2005 年、下水文化研究会の中で 2006 年はバルトン生誕 150 年にあたる節目の年であるので、大々的な記念行事を行えないか検討が始まった。同年 4 月から稲場夫妻は大学のサバティカル休暇 (職務を離れた長期休暇制度) を利用して渡英し、英国におけるバルトン先生本人については勿論のこと家系やその時代の雰囲気等についてまで精力的に調査を行った。この間、稲場夫妻は D. パトンさんや在エディンバラの高橋総領事に面会し、バルトンに関する日本・スコットランドのバルトン先生を通じた交流について打診し、全面的に協力する旨の回答を得た。

同年 8 月、稲場夫妻が帰国すると、さっそく研究会は記念行事開催に向けた準備に取り組んだ。11 月には東京大学名誉教授藤田賢二先生を委員長とする実行委員会を立ち上げた。委員会は「バルトン先生の生誕 150 年の年に当たり、私たちはここに改めて日本の近代化に尽くされた先生の功

績をしのぶと共に、その遺志を継承することを願い、併せて先生の母国への思いをスコットランドの人々に伝えるため、皆様のご賛同を得て、W・K・バルトン生誕 150 年事業を行いたいと思っております」との趣旨で多くの方々に呼びかけることにした。事業の賛同者には上下水道界のみならず日本スコットランド協会の方々 50 名が名前を連ねてくださった。

さらに、以下の団体が記念事業への後援を受諾してくださった。

厚生労働省、国土交通省、環境省、駐日英国大使館、スコットランド国際開発庁、(社)日本水道協会、(社)日本下水道協会、(社)日本写真家協会、(社)土木学会 NPO 法人日本スコットランド協会、NPO 法人日本下水文化研究会。

また、本事業に協賛してくださる方を一般公募したところ、実に 366 名の方々、10 の地方公共団体、36 の民間団体、11 の公益法人が協賛者になってくださったのである。資金面でもグレートブリテン・ササカワ財団、国際協力基金、大和日英基金から援助を受けることができ、内容の濃い事業になることが約束された。

一方、スコットランド側でもパトンさん、アランさん等 7 名の著名人が協力委員会を結成した。スコットランド側との連絡は稲永理事とアランさんが緊密なコンビを組み、記念事業成功の功労者となった。

3-5-2 日本側記念行事

2006 年 5 月 13 日、東京都庭園美術館新館大ホールにて、「W・K・バルトン生誕 150 年記念式および講演会」を開催した。参加者は約 230 名であった。第 1 部記念式では、厚生労働大臣(代)、国土交通大臣(代)、英国大使館ダニエル・ソルター氏、バルトンの曾孫である鳥海幸子氏、同メッツ・陽子氏の挨拶があり、デビッド・パトン氏からのメッセージが読み上げられた。その後、藤田賢二実行委員長が「わが国衛生工学の始祖バルトン」と題して基調講演を行い、バルトン先生の経歴、功績などについて紹介された。



W・K・バルトン生誕 150 年記念式

次に、バルトン先生の玄孫ケビン・メッツが友情出演の鮎沢京吾氏、M. ペニー氏とともに津軽三味線の見事な演奏を行った。

第二部は記念講演会として、以下の 3 人の講師が講演を行った。

- ★「バルトンの夢～その生涯を訪ねて～」大阪経済大学教授 稲場紀久雄
- ★「日本近代化のお雇い教師、W.K.バルトン」名古屋大学大学院教授 加藤詔士
- ★「写真家 W.K.バルトンが日本写真史に果たした役割」写真史家 金子隆一

また、記念式および記念講演会と併設で「バルトン関係資料展示会」を行った。これは稲場日出子さんが中心となって、バルトンが残した写真やバルトンに関連する資料をパネルにて分かり易く展示したものである。

3-5-3 スコットランド側記念行事

スコットランドで行われた記念行事に日本から「バルトン記念英国訪問団」を結成し、小林康彦氏（〈財〉日本環境衛生センター理事長）を団長として12名が参加した。

(1) アバディーン市記念講演会および展示会

9月6日、最初の記念講演会および展示会はアバディーン市のタウンアンドカウンティホールにて行われた。アバディーンはバルトンの父J.H. パートンの故郷であり、パトンさんはここに住んでおられ、市民の間でも名士として知られている。

スコットランド協力委員の一人、カピタンチック氏はアバディーン大学の名誉教授であり、その関係で講演会会場を無償で提供され、日本側団員は同大学のドーミトリー（学生寮）に宿泊したのである。



カウンティホールで講演する稲場先生

高橋周平日本国総領事の式辞に引き続き、ロンドン大学で日英交流史を専門とするイアン・ニッシュ名誉教授が講演を行った。アバディーン出身で日本でも知られているトーマス・グラバー、リチャード・ブラントン、ジェームス・マードックについて話をされた。次に稲場氏がバルトン先生について講演を行った。前記3人はともかく、バルトンについては地元参加者にはほとんど知られていなかった。しかし、バルトン先生がパトン氏の家系の人であることから親しみを覚えたのであろう。講演後聴衆の一人が「このような人物がいたことを誇りに思う。」と話しかけてきたことが今でも耳に残っている。

講演会后、日本側団員の一人としてアメリカから参加したケビン・メッツさんが津軽三味線の演奏を披露し、これまた大好評であった。津軽三味線が英語で「Three Strings Japanese lute」と紹介され、地元の方々は興味津々で聴き入っていたのが印象的であった。

(2) バルトン記念碑除幕式

9月9日、記念事業のハイライトともいえるべき「W.K. バルトン記念碑」の除幕式が行われた。この記念碑は日本から贈呈するものであるが、その製作はスコットランド協力委員会に託された。同委員会は英国でも有名なアインスワース・グラシエラ女史を指名した。彼女には稲永理事を通じてバルトンに関する様々な資料を提供し、彼女もバルトンを知るにつれて記念碑の製作に熱中していったようである。設置場所はナピーア大学構内にあるオールド・クレイグハウスの前庭である。ここはバルトン一家が17年にわたり過ごした所で、記念碑の収まり処としては最もふさわしい場所である。記念碑の設置には大学はもとより、エディンバラ市の許可をも必要とし、手続きはかなり面倒であったが、アランさんのお骨折りにより、無事除幕式を迎えることができたのである。

序幕はエディンバラ市長ハイデン女史、高橋総領事、D・パトンさん、小林康彦団長、ナピーア大学A・キュービー理事長によって行われた。記念碑の基礎部分には展示会に掲示されたバルトン



W・K・バルトン記念碑



記念碑前にて英国協力委員と日本側団員

関係の資料のコピーおよびこの記念事業に賛同され、寄付を寄せられた方々のお名前を記した名簿をタイムカプセルとして収納した。これが再び開かれるのはいつのことか、開かれたときの人々の表情を想像すると、何か楽しくなってはこないだろうか。

なお、ナピア大学は対数（ロガリズム）を生み出した大数学者 John.Napier に因んだ歴史ある名門大学である。

(3) 水環境シンポジウム

アバディーンからエディンバラに移動した翌9月8日、ヘリオット・ワット大学で水環境シンポジウムを行った。この大学は慈善活動家ヘリオットと蒸気機関を発明したジェームス・ワットを記念した大学であり、ここでも日本側団員のためにドーミトリーが提供された。構内には女性解放運動に先駆的に取り組み、バルトンの叔母に当たるメアリー・バートンを記念した建物も残されていた。

シンポジウムは E・チャドウィック講堂で以下の4人が講演を行った。

- ★稲場紀久雄：「The richness and human environment – some consideration on the basis of the traditional thought of Japan」
- ★小林三樹：「Review on 120-year history of modernisation of water supply system in Japan」
- ★酒井彰：「Cooperative activity to introduce ecological sanitation into rural area in Bangladesh – transferring Japanese experiences of a pre modern era」
- ★ Paul Jowitt: 「Engineering civilization from the shadows」

Jowitt 教授は同大学土木システム学科教授であり、英国土木学会副会長を務めておられる方である。E・チャドウィックは「英国公衆衛生の父」と呼ばれ、コレラ対策及びテムズ川浄化の観点から、ロンドン下水道建設の立役者になった人である。シンポジウムにこの功労者の名前が冠せられた講堂が会場として用意されていた。大学のさりげない計らいに英国側の心配りを感じた次第である。

なお、シンポジウム終了後、高橋周平在エディンバラ日本総領事が総領事館でレセプションを開いて下さり、楽しい交流の場を提供して下さった。感謝であった。

3-5-4 記念行事総括

明治維新で近代化の歩みを始めた日本にとって W・K・バルトンという優れた技術者、技術者だ

けでは収まらないスケールの大きな人材を得たということは何と幸せなことだったのかとつくづく思わせられる。人間にとっての最も大切なライフラインの基礎を若き日本人たちに教え、それによってどれほどの日本人の命が救われたことか。そればかりか写真界や高層建築の設計・監督までも行ったその能力には驚嘆するばかりである。しかし、これだけの功績を残しながら、生まれ故郷に帰る直前に急逝されたことに何とも不条理な運命のいたずらというか理解しがたい不合理を感じざるを得ない。

生誕 150 年記念行事を行ってみて、ようやくバルトン先生を故国に送り届けられたという思いを実感できた。バルトン先生の子孫にあたられる方々、バルトン先生の出生地の方々が今回初めてバルトン先生のことを知って心から喜び、バルトンを改めて誇りに思うと述べられた様を見るにつけ、そのような思いに駆られたからである。今回の交流により日本とスコットランドの交流は深まった。私たちはこれからも、バルトン先生から受けた賜物が現在にも引き継がれてその恩恵に与っており、さらに将来へも引き継がれることを思えば、バルトン先生への感謝の気持ちを忘れてはならないと思うのである。

本事業を実施するにあたり、366 名の個人の方々、36 の民間団体、三つの財団から合計 844 万円余のご寄付を賜った。心から感謝申し上げる次第である。

3-6 W・K・バルトン記念日英交流事業 2009

2006 年「バルトン生誕 150 年記念事業」は成功裏に終了したが、同事業実施の中心的な役割を担った NPO 法人日本下水文化研究会は、2007 年 5 月バルトンの功績を語り継ぎ、さらに日ス友好を進めるために「バルトン記念基金」を設け、同基金管理委員会（委員長稲場紀久雄大阪経済大教授）を設置した。同委員会は、水環境改善に貢献している個人及び団体にバルトン賞を授与することとし、バルトン賞選考委員会（委員長小林康彦日本環境衛生センター会長）を設けた。

同管理委員会は、2006 年に日本からの訪英団が高橋周平在エディンバラ日本総領事から日ス交流の継続を示唆されたこと、2009 年は記念碑建立から 3 年になるうえ、スコットランドを挙げて「Home Coming Scotland 2009」という行事（海外のスコットランド人に母国の訪問を促すための行事）を展開することに鑑み、スコットランドのバルトンゆかりの人物であるデヴィット・パトン氏と記念行事開催について協議した。その結果、同氏は全面的に賛同された。

2009 年にスコットランドで記念事業を行うためには、バルトンの業績が上下水道界に及んでいることから、改めて実行委員会を設置し、「バルトン記念日英交流事業 2009 実行委員会」（委員長小林康彦日本環境衛生センター会長）を設立して本事業を実施することとした。

3-6-1 日本側行事

(1) W.K. バルトン・メモリアルコンサート

2009 年 5 月 9 日、青山霊園にて約 30 名が参加し、バルトンの墓参を行った。墓碑前ではバ



W.K. バルトン・メモリアルコンサート

ルトンの玄孫ケビン・メッツ氏、新田昌弘氏により津軽三味線によるスコットランド民謡が演奏された。

同日午後、日本キリスト教団原宿教会において「W.K.バルトン・メモリアルコンサート」を開催した。実行委員会副委員長稲場紀久雄氏から趣旨説明がなされた。演奏者はバルトンの玄孫ケビン・メッツ氏（津軽三味線）、小林ユカリ氏（バグパイプ）、新田昌弘氏（津軽三味線）の3名で、日本の伝統的な民謡からスコットランド民謡、西洋クラシック曲等極めてユニークなプログラムであった。日英両国の伝統楽器によるコラボレーションであったが、違和感はなく、むしろ新鮮な感動を覚える演奏であった。日英の懸け橋になったバルトン先生にまさにふさわしい演奏会であったと言えよう。

3-6-2 英国側行事

2009年9月、日本から酒井彰流通科学大学教授（NPO 日本下水文化研究会代表）を団長とする8名が日本側デレゲーションとして訪英した。

(1) 日ス交流レセプション

9月11日、日英交流事業2009記念の一環として田良原政隆 在エディンバラ日本総領事が総領事公邸において日ス交流レセプションを主催してくださった。スコットランド側からは、ヒスロップ教育・生涯学習担当大臣、ほか約20名、日本からの団員8名が招待された。中でもウィリアム・パトン、ピーター・クレランド氏等、メッツ・陽子、ケビン・メッツ氏等日ス両国のバルトン先生の子孫にあたる方々が一同に会し得たことは大きな喜びであった。「Home Coming Scotland 2009」という運動の最中で、バルトン先生ご本人は東京で病没されたので帰国が叶わなかったが、バルトン没後110年を経過して、その子孫が故国を訪問し、一家が出会えたことはまさにこの趣旨に合致するものであった。

スコットランドの参加者も今回が2回目であったこともあり、互いに更にフレンドリーな交流となった。

(2) ベンチ贈呈式及び記念植樹

9月12日、スコットランドでは珍しい快晴の下、今回日本から寄贈した大理石のベンチの贈呈式と桜の記念植樹をエディンバラ・ナピアー大学構内で行った。ロブ・マン エディンバラ副市長と酒井彰団長が序幕を行った後、桜の若木に全員で土をかけ、スコッチウィスキーと日本酒で乾杯を行って植樹式を終了した。

2006年に日本からの寄贈により建立されたバルトン記念碑からバルトンが幼少期を過ごしたオールド・クレイグハウスを挟む小高い丘の中腹にベンチは設置された。ベ



寄贈したベンチと桜の植樹（両側）

ンチに座ってみると、フォース湾やエディンバラ市内を一望することができる。ナピーア大学の学生や研究者たちが読書したり、思索するには絶好の場所である。植樹した桜の木が大きくなれば、満開の時にはさぞや壮観となること間違いないであろう。

(3) 第2回バルトン賞授与及び記念講演

第2回バルトン賞はスコットランドにおいてバルトン家について研究されているアン・ジョーンズ女史（ヘリオット・ワット大学アーカイビスト）とバルトン記念日英交流事業に多大な貢献をされたアラン・ウィルソン氏（前スコットランド産業振興協会 CEO）に授与された。副賞としてバルトンの曾孫である鳥海幸子さんの筆による日本画の掛け軸が贈られた。桜の花が描かれた日本画の繊細な筆致に参加者の多くが賞賛の目を持って鑑賞していたのが印象的であった。



バルトン賞 アラン・ウィルソン氏（左）



バルトン賞 アン・ジョーンズ氏（左）

引き続き記念講演会が持たれた。はじめに中尾友昭下関市長、松浦正敬松江市長、小林康彦実行委員長からの英文メッセージが配布された。次いで、ナピーア大学 J.L. リース副学長は「ナピーア大学はキャンパス内にあるバルトンが育った Old Cgaighouse を大切に保存してきた。今回のイベントが若い学生達に日本とスコットランドの親密な関係を知ってもらう良い機会になる。」と挨拶され、その後、田良原総領事の祝辞、バルトン先生の子孫の方々がスピーチを行った。

今回は D・パトンさんが体調の不具合から参加できず、ご子息ウィリアム・パトン氏が出席された。同氏は「21歳のときに来日し、日本におけるバルトンの業績と日本人から今でも尊敬されていることを知った」と話された。D・パトンさんは今後の交流の窓口をウィリアムに譲ったことを明かされ、世代交代が行われることになった。日本側からはメッツ・陽子氏が初めてのスコットランド訪問にもかかわらず、暖かい心に触れて、懐かしい感じがしたと話された。

記念講演は酒井彰団長、アン・ジョーンズ氏、稲永丈夫氏の3人が行った。

酒井彰団長は NPO 日本下水文化研究会が行っているバングラデシュにおけるエコサントイレの普及活動について、この活動はバルトンが衛生状態の良くなかった明治時代の日本において実践しようとしたことと精神的に一致するものであると説明し、会場は深い共感を持って受け止めていた。

アン・ジョーンズ氏はバルトン研究に対する稲場夫妻の功績を高く評価した後、バルトンの叔母に当たるメアリー・バートンが行った女性の地位向上への活動について紹介した。ヘリオット・ワット大学にはメアリー・バートンを記念してその名前を付した建物が現存している。

最後に稲永丈夫団員が「二つの110年」と題して講演された。これはバルトン死後110年、不

平等条約が改正されて日本が真に独立して 110 年になることをヘンリー・ダイアーや山尾庸三の功績を振り返りつつ説明された。

これらの後援を聴講した日本からの留学生たちは、どの講演も初めて知った話題で、大変興味深い内容で重く受け止めたと話していた。

(4) 事業の評価

2006 年の日ス交流の時は英国協力委員の中にすらバルトンについて余り知識を持っていなかった人もおられた。そのため講演会、セミナー、資料展などを実施した。その結果、参加された現地の人々はバルトンをスコットランドのニューヒーローとして受けとめた。

今回の日ス交流事業は 2 回目でもあり、前回よりは地道に行うこととした。しかし、英国協力委員会は前回以上に意欲的であった。レセプションに閣僚クラスの方を招いたり、報道機関への情報提供などにその姿勢が見てとれた。特に、バルトンについてスコットランド内にもっと知らしめたいとの思いが強く感じられ、その証拠にナピーア大学は広報担当者が相当に活躍されたとのことであった。

日ス交流の目的は、バルトンの大きな功績に対する日本人の気持ちを伝えるのみならず、活動内容をスコットランドの人々にも知っていただくことである。今回は、英文 Wikipedia にバルトンが掲載されたことを知った。また協力委員会の努力によってスコットランド最大の発行部数を持つ「The Scotsman」や「Daily Express」紙、BBC が報道するなどバルトンに関する関心が出てきたことを強く感じる事が出来た。ただ、マスコミの関心は上下水道よりも日本最初の高層建築「凌雲閣」に重点がおかれていた。マスコミとしては目に見える形で紹介するには写真のある浅草十二階の方が取り上げ易いのかも知れない。しかし、バルトン没後 100 年以上になるのになお日本人の有志が毎年バルトンの墓参を行い、お花とスコットランド民謡を墓前に捧げていることを驚きをもって報じている。

今回の講演会にはバルトン以外に日本で活躍したスコットランド人についても知りたいと英国側から要望された。彼らが知らないスコッツのヒーローがまだまだいると思ったのかもしれない。あるいは知っているも日本側からの見方、あるいは評価について知りたかったのかも知れない。いずれにせよ、稲永氏が工部大学校の初代教頭ヘンリー・ダイアーや山尾庸三を取り上げたのは適切であった。このように英国側の意識が変化してきたことは 2006 年の交流の成果と考えたい。

2006 年の記念事業の際に、ナピーア大学の A. キュビー理事長はバルトン記念碑が学生に与える影響に期待していた。スターリング大学に留学中の日本人学生 10 名が本行事に参加したが、スコットランド人学生の参加は残念ながら見られなかった。新学期開始直前で学生が戻ってきていなかったことが大きな原因と思われるが、両国とももっと若い人たちの参加を期待して、第 2、第 3 のバルトンが生まれることを期待したい。

今回のプロジェクトも前回同様、成功裏に終了することができた。これは日本、スコットランドの多くの方々からの温かいご寄付やご支援があったからであり、実行委員会として深く感謝の意を表したい。

(谷口 尚弘)